ZOCALO 2016 2▸3

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

企画展「原田直次郎展－西洋画は益々奨励すべし」 2016年2月11日（木・祝）～3月27日（日）

100年ぶりの回顧展に寄せて

1909（明治42）年11月末の日曜日、ある画家の展覧会がたった1日だけ開催されました。画家の名前は原田直次郎。亡くなってからすでに10年が経っていて、この展覧会のために奔走したのは森鷗外でした。

明治の洋画家・原田直次郎（1863－1899）は幕末の江戸に生まれ、若くして西洋絵画を勉強するためにミュンヘンへ留学しました。ミュンヘンで出会った森鷗外とは生涯にわたる友情を結び、鷗外の小説「うたかたの記」のモデルにもなっています。代表作の《靴屋の親爺》や《騎龍観音》を残し、西洋絵画を日本に広めようと努めましたが、病に倒れ、わずか36歳で夭折。鷗外は没後10周年の年に、原田のために作品を集め、カタログにあたる『原田先生記念帖』を編集し、東京美術学校で1日だけの展覧会を開催したのです。

そして2016年2月、およそ100年の時を経て再び原田直次郎の回顧展が開かれようとしています。この貴重な機会に、協力して調査を続けてきた各美術館の方々と当館の担当学芸員が展覧会への思いを寄せました。(T.Yo.)

原田直次郎《靴屋の親爺》1886年　重要文化財　東京藝術大学所蔵

原田直次郎は、実に不思議な画家です。少しでも近づきたいと「紐解こう」とすると、次々小窓が開くのですが、あまりに広がりすぎて逆に霧散してしまい、本体がつかめません。で、**気がつくと原田中毒**です。でもそれが魅力です。

島根県立石見美術館
専門学芸員　左近充直美

第2章にご注目！
《靴屋の親爺》に代表されるミュンヘン留学時代の原田作品とともに、師マックス、友人エクステルやプファフ、また原田在籍時のアカデミーの教師でエクステルやプファフが師事したギジスの作品などを紹介しています。

岡山県立美術館 学芸員　橋村直樹

日本近代美術に数多の油彩画あれど、《靴屋の親爺》は孤高の存在。美術館の学芸員になったときから、いつかこの作品を展示したいという欲望にかられていました。いまそのときが近づいていることに、**最高にドキドキしています。**

埼玉県立近代美術館 学芸員　吉岡知子

西欧から渡来した油画は鎖国のため長い忘却のうちに封印された。が、一人の画家が、開国後、開封された油画を世界的水準で描きあげる。原田直次郎。**「奇跡」という意味での「現象」**。その油画の神々しいまでの存在感。驚くべき「現象」としてそれらは私の心を鷲掴みにする。

神奈川県立近代美術館 館長　水沢勉

森鷗外に夢みる人といわれた原田直次郎の油画は「芸術の自由と美」をロマンチックに謳いあげた。明治の芸術が現代に生きる私たちをかきたてる**"イマジン"の魅力**。

岡山県立美術館 顧問　鍵岡正謹

このところ、西洋画に人生を賭けた明治の画家を紹介する展覧会が相次いで開催されています。ゴセダに感激したあなたも、見逃したあなたも、**今春はハラダを見てからクロダへ行こう！**日本洋画の黎明期が、より立体的に感じられるに違いありません。

埼玉県立近代美術館
学芸主幹　大越久子

原田はその不遇ばかりが目立ちますが、私は森鷗外の次の言葉にいつも囚われています――**「思うに、原田は必ずしも不幸な人ではなかった」**。文豪のこの言葉の思いを、そして多くの門弟が惹かれた彼の魅力を、私も本展で知り、伝えることが出来れば幸いです。

神奈川県立近代美術館
主任学芸員　髙嶋雄一郎

確かな腕と高い理想を持ちながら志半ばで病に倒れ、洋画壇を去った悲運の画家。なれど森鷗外をはじめ彼を愛した人々が語るエピソードに悲壮感はない。重厚な作品とともに、**明治の美術界を駆け抜けた風のような人生**を多くの人に知っていただきたい。

島根県立石見美術館 専門学芸員　川西由里

MOMAS コレクションⅣ　2016年1月23日（土）～4月10日（日）

アーティスト・プロジェクト「島州一　世界の変換と再構築」オープン

33年前、開館してまもない埼玉県立近代美術館の展示室にガッツン、ゴロゴロゴローッと異様な音が響いていました。音の主は高い脚立に乗った島州一さんです。床には直径8mほどの円状に砂が盛られ、中央には数トンはあろうかという巨石が置かれています。その巨石めがけてかぼちゃ大の割栗石を両手で抱えて静かに落下させます。栗石は巨石の任意の1点に当たり、跳ね返されて砂上を転がり止まります。栗石が真っ二つに割れたこともありました。「版画の今日」展に出品された新作《ニュートンによる枯山水》の制作のひとこまです。島さんにかかるとこの枯山水も重力が生み出した立派な版画作品です。

《ニュートンによる枯山水》1984年（「版画の今日」展の会場スナップ）

1970年代の作品では、石や布、電話帳などさまざまな媒体に、情報社会がもたらす複製イメージを転写し、それをゲリラ的な行為を含めて現実の世界に投げ返していく手法が中心でしたが、島さんは一貫して版の概念を問い直し、美術の概念を揺さぶり拡張する仕事を展開してきた先駆者のひとりでした。

2007年からはライフワークとして、浅間山に自らを投影した《Tracing-Shirt》シリーズを展開しています。また《ASAMA いろは歌》などペーパーワークの制作に加え、ニュアンスに富んだ触覚的な色彩が印象深い油彩画連作《言語の誕生》も制作しています。そこには島作品の通奏低音ともいえる「椅子」（存在の影）のアイコンも添景として登場します。

本展では、こうした近作を中心に、その一貫した歩みを現在の視点から振り返ります。(M.N.)

今回の展示の主要なコンセプトは、1970年代の作品に使用されていた写真映像が30余年の時間を経てどうやって2015年の映像に変化帰結しているか、というプロセスの検証である。

1970年代の作品のモチーフは主に時代を象徴する雑誌表紙の、マスコミに流通している映像であった。それらの映像を物（リアル）にかぶせたり印刷したりして、情報化時代の風潮に対抗していたが、一方私の胸の内では、ストレートに安易に出来合いの映像や、例え自分で撮った写真だとしても、自分が直に描いていない映像を使うことに、常に後ろめたさを覚えていた。写真を使うこと自体が・・・。

現代社会の仕組みは正に情報化社会であり、リアルとヴァーチャルが極端に混在しているのが現代生活そのものである。

情報と物の衝突を如何に直接絵に描くことができるか？ 以上の問題を追求し自分の絵画のシステムを確立し表現として活性化することに30年余り費やしてしまった。

絵を志した頃から私には石膏デッサンが悩みの種であった。その理由は当然両眼の複眼で石膏を描くのであるが、その時どうしても輪廓線が左右の眼で見た時に、画面上に一本の線として確定できないことが苦悩の種であった。

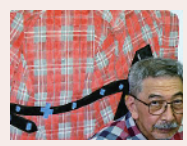
その問題は依然として私の前に存在するが、見ることの不条理性といった問題に気付き、その背後に拡がる世界を識った。

私が現実空間内のものを直に描写しないのは、複眼でものを描写するシステムを使えないからで、その問題を単眼で描けるシステムに変えることを考えた。それがトレースの技法となる。そして私の技法は描くもの、対象物に実際に触れながら輪廓線を描く。云わば眼の見えない視覚障害者が物に触りながら対象物を確認する方法と同じである。

現在は浅間山を通してシャツに自分をメタモルフォズさせながら、私自身の象徴として提示している。

2015年11月29日　島州一

左：《ジーンズ》1975年（特別出品、栃木県立美術館蔵）／中：《Tracing-Shirt 164》2013年（特別出品）／右：《言語の誕生 354 添景》2005/2015年（特別出品）



島 州一　SHIMA, Kuniichi

1935年、東京生まれ。多摩美術大学在学中から「集団・版」の結成に参加し活動。現代日本美術展等に出品、受賞。1975年、関根伸夫と全国約30か所の画廊で日本縦断展を開催。1987年からアナログとデジタルの変換で多種のメディアを使う。2005年、武蔵野美術大学紀要に「言語の誕生」を寄稿。2006年にASAMAシリーズを、2007年に《Tracing-Shirt》シリーズを開始。

はみだしソカロ 009　清親→ピサロ→タイガー立石→雪岱→紫紅→山本信→アーガイル→白羊→青樹→河内成幸→恒友→白髪。埼玉近美で干支探し。「亥」は苦し紛れ。誰か見つけて！　（mold・酉年・女性）

はみだしソカロ 010　室生犀星「ふるさと」の詩はとても美しい。この詩を私の義理の母が書にしたものを、正月に3歳の娘が真似して一途に書いていた。とけにけり、とけにけり、とけにけり、とけにけり、とけにけり…。　（親バカ・37歳・男性）